

# バレーボールのレシーブにおける注視点の研究 A study of eye points at receiving in volleyball

1K07A190-4

藤村 瞳

指導教員 主査 矢島 忠明先生

副査 正木 宏明先生

## 【目的】

バレーボールにおけるレシーブ動作は、まず、目で相手の選手やボールの位置などの情報を得て、ボールがどこにくるかを予測し、ポジショニングを決め、そしてボールに反応してレシーブ技術を遂行するという流れがある(柏森 2005)。仮にレシーブのフォームを作る練習をしても、ボールに正しく反応することができなければ、良いレシーブを行うことはできない。よって、判断力・予測力はレシーブを行う上でとても大切な要素となる。これまでに運動中の視野に関する研究は行われてきたが、バレーボールのレシーブに関する視野の研究は行われていない。そこで、本研究では、レシーブ技術の遂行の前段階で、熟練者は様々な局面においてどこを注視しているのかを明らかにすることを目的とした。

## 【方法】

本研究の被験者は、熟練者は現在関東大学一部リーグ大学バレーボール女子部に所属している選手6名であった。また、未熟練者は大学バレーボールサークルで活動する学生6名であった。被験者にアイマークレコーダーを装着させ、相手コートで展開されるスパイクのコンビネーション攻撃を、スパイクを実際にレシーブするつもりで構えさせ観察させた。レシーブ技術の遂行の前段階において、何を注視しているかを表わす注視点の移動と、それぞれの注視点項目が対象に滞在している時間を表す注視時間の2つを熟練者と未熟練者で比較して分析・検討した。

## 【結果】

本研究において、熟練者も未熟練者も注視点の移動はほぼ同一の傾向を示した。一方、トス～アタック局面において、熟練者は未熟練者よりもボールの注視時間は有意に長く、アタッカーにおける注視時間は有意に短かった(図1)。

## 【考察】

熟練者は未熟練者よりも多くの項目からレシーブ動作に必要な情報を得ているのではないかと仮説を立てていたが、本研究の結果は、その仮説と異なり、注視点の移動には熟練者と未熟練者との違いはなかった。本研究では、未熟練者に全国大会出場経験者はいなかったが、熟練者と同程度のバレーボール歴をもつ大学生であった。中学生や高校生で経験年数の少ない選手の場合、レシーブ時に見る項目(ボール軌道や相手選手の動きなど)は少ないが、年齢を重ねバレーボールの経

験年数が増加するに従い、ある程度多くの項目をみてレシーブ動作に必要な情報を得ることができると推察される。このことから、大学生ほどの長い競技歴になると注視点の移動は熟練者も未熟練者も同様にできるようになっているため、見ているものはレシーブの技術力の優劣を決定付ける因子にはならないということが明らかになった。

熟練者のボールにおける注視時間が長いという結果であった。後藤ら(2001)は、熟練者はボール以外のものをよく注視していて、未熟練者はボールだけを注視していることが多いことを報告している。本研究においても、ボールを見ている時間は、未熟練者群の方が長いと予想されたが、熟練者の方がボールにおける注視時間が長いという結果であった。これらのことが、熟練者は情報を速く的確に把握する能力に長けており、未熟練者よりも短い時間でボール以外の予測に必要な情報の把握につながったと考えられる。熟練者は短い時間で状況を把握することで、残りの時間は未熟練者よりも長くボールを注視し、ボールに集中できていたと推察される。

## 【まとめ】

競技歴の長い選手がさらにレシーブ時の注視力を向上させるためには、周囲の状況をできるだけ短い時間で正確に把握し、視点の切り替えを速く行い、最終的にはボールに正しく反応するために、ボールに注視点をあわせて集中することが大切であるといえる。また、ボールを注視しながらもプレーに必要なボール以外の周囲の情報を把握する周辺視野の能力を高めることが大切であることが示唆された。

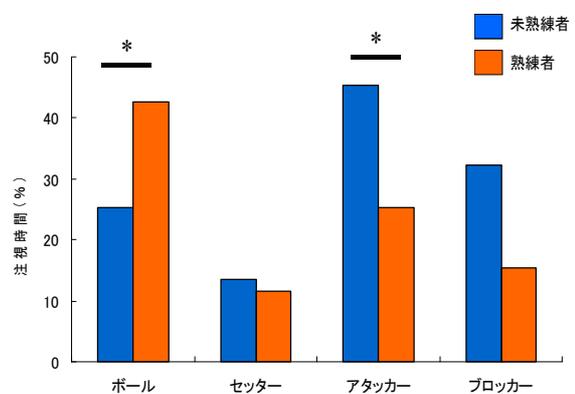


図1 レフト試行の注視時間(トス～スパイク局面)

\*は両群間が有意であることを示す(p<0.05)